

はじめに——「友人重視指向」の日本の高校生

こんな調査があります。

日本、アメリカ、中国、韓国かんこくの高校生に、「若いうちにぜひやっておきたいことは何ですか」という質問をしたところ、日本の高校生は、「一生つきあえる友人を得たい」とか「いろいろな人と付き合って人間関係を豊かにしておきたい」と答える人がかなり高い割合になったそうです（日本青少年研究所『高校生の意欲に関する調査』）。

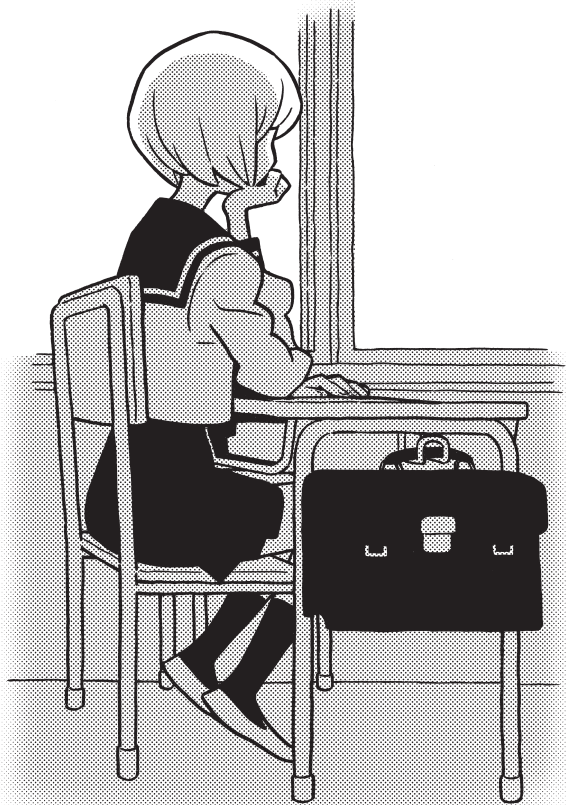
もちろん他の国の高校生も「友だちは大事だ」という意識は強いのですが、そのほかにも「偉えらくなりたい」とか「自分をみがきたい」という、未来に対してアグレッシブな意見が多く見られます。それに比べて日本の高校生は「偉えらくなりたいとは思わない」「そこそこ生活できればいい」という将来に対する醒さめた意識が他の三国に比べて目立つ一方で、「友人重視指向」の傾向けいこうが突出とつしゅつして高いのです。

でもその一方で、現実には友だちをめぐるいろいろな悩みや問題を抱えた人も多いのではないのでしょうか。いじめや引きこもりが社会問題として注目をあびてから、ずいぶん時間が経っています。言ってみれば、日本の若者は、人と人とのつながりをとても重視していると同時に、人とのつながりをどのように築き上げたらよいのかという問題について悩み、人とのつながりに自信を持ってなくなっているのではないのでしょうか。

友だちの数は多いはずなのになぜか寂しい。このところ友だち付き合いに疲れている。新しい友だちは作りたいけど、なんとなくこわい。あるいは、彼氏や彼女がいても、その関係がしっくりこない人や、親子の仲がうまくいっていない人、大事な仲間と価値観が合わずに悩んでいる人もいるでしょう。

友人や親しい人との関係を大切にしていくという調査結果とは裏腹に、最近こういう人たちが増えていくように思います。

身近な人との親しいつながりが大事だと思っていて、そのことに神経がすり減るぐらい気を遣っている。なのにうまくいかないのは、なぜなのでしょうか。



友だちが大切、でも友だちとの関係を重苦しく感じてしまう。そうした矛盾むじゆんした意識をつい持ってしまうことはありませんか。

こうした問題を解きほぐして考え直すためには、じつは、これまで当たり前だと思っていた「人と人とのつながり」の常識を、根本から見直してみる必要があるのではないかと私は思うのです。

タイトルに「友だち幻想げんそつ」とつけたのもそのためです。

知らず知らずのうちに、私たちはさまざまな人間関係の幻想にとらわれているのではないか。固定こていした思い込みおもひこみにとらわれているために、ちよつと見当はずれな方向に気がつかいすぎて、それで傷ついたり途方とほうに暮れたりしているのではないでしょうか。

だから、今まで無条件にプラスの方向、無条件に良いものと考えられてきた「身近な人とのつながり」や「親しさ」のあり方について、ここであらためて腑分けふわきをして、きちんと考えてみようと思うのです。

この本は、身近な人たちとのつながりを見つめなおし、現代社会に求められている

「親しさ」とはどのようなものであるかをとらえ直すための、「見取り図」を描こうとしたものです。

私たちが自分にとってとても大切だと考える問題に出会った時に役立つ見取り図とはどのようなものでしょうか。それはまず、大事な問題を「きちんと腑分けして考える」ためのヒントを与えてくれるものです。重要なテーマをきちんと分けて考える、本書のテーマに即せば、「友だち」とか、「親しさ」についてどのように考えるのかというテーマときちんと向き合うために、考え方の方向性や考えるためのキーワード群から構成されている見取り図を示してみたいのです。そうした考え方の方向性やキーワードを理解してもらって、後は読者の皆さんが自分の体験に即して具体的に考えてもらえばいいと思います。私がこれから本書で提示する見取り図を参考にして、今度は皆さん自身が「友だち」や「親しさ」について考えを深めてみる。そうすると、ごちゃごちゃといういろいろ考えあぐねてこんがらがっていたことが、すっと解けるように見えてくることがあると思うのです。

ですからこうした問題を考えるためには、私はこの本でキーワードをいろいろと提示したり、そのキーワードにしたがって問題を整理していこうと思います。

私は社会学者なので私の専門である社会学の手法や考え方を使って、そこに私自身の考えを加えて、考察を進めました。でも面倒くさいデータや、難解な専門用語は、ほとんど出てきません。ですので、「友だち」のことでいままさに悩んでいる、若い読者の皆さんにぜひ読んでほしいと考えています。

もちろん、親御さんや先生方、一般の方にも参考になるように書いたつもりです。

本書が、人と人とのつながりについて改めて見直すきっかけになればと願っています。

第1章 人は一人では生きられない？

一人でも生きていける社会だからこそ〈つながり〉が難しい

「人は一人では生きていけない」

皆さんは先生やご両親から、よくこうした言葉を聞かされたことはありませんか。テレビドラマなどでもこんなセリフをよく耳にします。「たしかにそうだな、人間一人では生きていけない」、とこの言葉に素直に納得する人もいるかもしれませんが。でも反対に「ホントにそうかな。なんかしっくりこないな。人はじつは一人でだって十分生きていけるんじゃないかな」と思う人だっているでしょう。

皆さんはどう思われるでしょうか。

この問いに関する答えの傾向としては、こんな予想が立てられます。年齢が上になれ

ばなるほど、そして暮らしている場所が地方であればあるほど、「人は一人では生きて
いられない」と答える可能性が高い。そして若い年代でしかも都会暮らしであればある
ほど、「案外人間は一人で生きていけないか」と答える割合が多いのではない
かと。もちろん都会暮らしの若者すべてが「一人でも生きていられる」と考えるわけ
ではないでしょう。しかし全体的にはこうした傾向が見られるのではないかと思われま
す。

人と人との〈つながり〉の問題を考える最初の出発点として、人は本当に一人では生
きられないのか、それとも、まあそれなりに生きていけるのかといった問いを立ててみ
ましよう。

かつての日本には「ムラ社会」という言葉でよく表現されるような地域共同体が存在
していました。「ご近所の人の顔と名前はぜんぶわかる」といった集落がそれですね。
これは、何も地方の農村や漁村だけに限ったことでなく、東京のような都会にだってあ

ったのです。『ALWAYS 三丁目の夕日』——映画ですから描き方^{えが}にはフィクションの要素も多分に入っているとはいえ——のように、近所に住む住人同士の関係が非常に濃密な「ご町内」が、昭和四〇年くらいまでの日本には確かにありました。

そんな「ムラ社会」が確固として存在した昔であれば、これは明らかに「一人では生きていけない」ということは厳然とした事実でした。

なにより、食料や衣類をはじめ、生活に必要な物資を調達するためにも、仕事に就くにしても、いろいろな人たちの手を借りなければいけなかったからです。こうした、物理的に一人では生活できない時代は長く続きました。だから村の交際^しから締め出^だされてしまう「村八分」というペナルティは、わりと最近まで死活問題だったわけです。

ところが近代社会になってきて、貨幣^{かへい}（＝お金）というものが、より生活を媒介^{ばい}する手段として浸透^{しんとう}していくと、極端^{きょくたん}な話お金さえあれば、生きるために必要なサービスはだいたい享受^{きやうじゆ}できるようになりました。

とりわけ、今はコンビニなど二十四時間営業の店も増え、思い立った時にいつでも生

活必需品ひつじゆひんは手に入れられるし、ネットショッピングと宅配を使えば、部屋から一歩も出ずにあらゆるサービスを受けることも可能になっています。働くにしても、仕事の種類によってはメールとファックスで全部済んでしまう場合だってあります。

このように、一人で生きていても昔のように困ることはありません。生き方としては、「誰だれとも付き合わず、一人で生きる」ことも選択可能なのです。

ある意味で、「人は一人では生きていけない」というこれまでの前提がもはや成立しない状況じようきようは現実には生じているといえるのです。

さて、こうした現代的状況を目の前にして私が言いたいのは、「だから、一人でも生きていけるんだよ」ということではありません。みんなバラバラに自分の欲望のおもむくままに勝手に生きていきましようといったことでもありません。「一人でも生きていくことができてしまう社会だから、人とつながることが昔より複雑で難しいのは当たり前だし、人とのつながりが本当の意味で大切になってきている」ということが言いたい

のです。つながりの問題は、こうした観点から考え直したほうがよさそうです。

今の私たちは、お金さえあれば一人でも生きていける社会に生きています。

でも、普通の人間の直感として「そうは言っても、一人はさびしいな」という感覚がありますね。本当に世捨て人のような生活が理想だという人もいないわけではありませんが、たいてい、仮にどんなに孤独癖こどくへきの強い人でも、まったくの一人ぼっちではさびしいと感じるものです。

ではなぜ一人ではさびしいのでしょうか。やはり親しい人、心から安心できる人と交流していたい、誰かとつながりを保ちたい。そのことが、人間の幸せのひとつの大きな柱を作っているからです。だからほとんどの人が友だちがほしいし、家庭の幸せを求めているわけです。

あの人と付き合うと便利だとか便利じゃないとか、得だとか損だとかいった、そういった利得の側面で人がつながっている面もたしかにあるけれども、しかし人と人とのつながりはそれだけではないわけです。

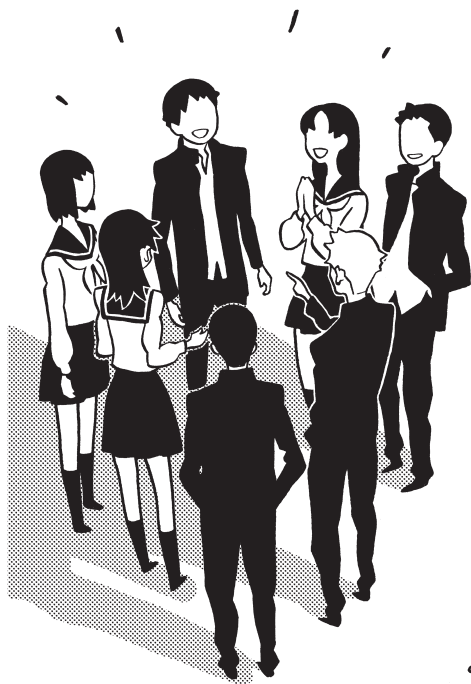
だから、「人は一人でも生きていけるか」という問いに対する私の答えは、「現代社会において基本的に人間は経済的条件と身体的条件がそろえば、一人で生きていくことも不可能ではない。しかし、大丈夫、一人で生きていると思ひ込んでいても、人はどこかで必ず他の人々とのつながりを求めがちになるだろう」です。

「親しさを求める作法」が、昔とは違ちがう

誰でも、「人と親しくなりたい」、「人と人とのつながりの中で幸せを感じたい」と願うものです。本質的に人間は、つながりを求めるものなのです。

しかし、現代は、それを求めることによってかえって傷ついたり、人を追い詰めたりするような状況に陥おちることがあります。この本を手にとった皆さんだって、少なからずそんな経験をしたことはあるでしょう。

どうしてそうなってしまおうのでしょうか。



一つには、「親しさを求める作法」が、いまだに「ムラ社会」の時代の伝統的な考え方を引きずっているからなのだ。私は考えています。

じつはご年配の方はもちろん、意外なことに若い人の中にも、その「古い作法」を引きずっている人は結構多いのです。むしろ若い人のほうが、「古い作法」に強く純粹じゆんすいに従っている傾向があるかもしれません。

ある程度社会経験を重ねれば、のらりくらりとかわせることも、若い人は真正面から受け止めてしまいがちです。中学、高校などの部活動における先輩―後輩の関係の作りなどをみると、そう感ずることがあります。一歳か二歳しか違わないのに、かなり厳しい上下の関係を守っている場合がありますね。だから辛いつらし、ときとして爆発ばくはつしてしまうこともあるのではないのでしょうか。

私たちはある種の共同体的なつながりや関係の中で培つちかってきた、とりわけ日本人的な親しさの作法をお手本にし続けています。そこには確かに、損得を超こえて人を全面的に包み込むような温かみや情愛の深さを受け継ついでいる面もあるかもしれません。だから

無下^{むげ}に否定してしまうわけにはいかないという側面が確かにあります。しかし、みんな同じような職業や生活形態を前提とするムラ的な共同体の作法では、もはや親しさを維持^じすることはできないほど、私たちの置かれている状況は以前とはすっかり変わってしまつたと考えた方がいい。ムラ的な伝統的作法では、家庭や学校や職場において、さまざまに多様で異質な生活形態や価値観をもった人びとが隣り合^あつて暮らしているいまの時代、にフィットしない面が、いろいろ出てきてしまつていのです。そろそろ、同質性を前提とする共同体の作法から、自覚的に脱却^{だつきゃく}しなければならぬ時期だと思ひます。このことは、これを読んでくれる若い人たちにもあてはまるだろうし、何よりもいまの学校の先生や、親御さんにも、ぜひご理解をして頂きたい大事な側面だと私は考えています。

基本的な発想として、共同体的な凝集^{こくたいてき}された親しさという関係から離^{はな}れて、もう少し人と人との距離感^{ていねい}を丁寧に見つめ直したり、気の合わない人とも一緒にいる作法というものをきちんと考えたほうがよいと思うのです。人と人とのつながりについて、基本

的な発想の転換てんかんを試みてみようと思うのです。そのことが本書の重要なテーマとなっているのです。